

「大堰河——我的保姆」分析ノ才ト

小笠原 洽 嘉

一、『艾青伝』（周紅興）の一節から

周紅興は『艾青伝』の中で、こう言っている。

如果我們把今天的艾青、比喻為巨大的詩的河流、那么、它的永不枯竭的源頭、就是“大堰河”、他的詩的情懷、詩的主題、詩的靈魂、詩的美、都可以从這個源頭得到解答。（1）

象徴的な文章だが、実は周紅興の艾青解釈の結論だとも考えられる。艾青には概ね、四八七編²の詩作品が全集に収録されているが、その詩の形態も、叙情詩、叙事詩と多様である。力作と讃えられ、若者たちが台上で朗誦した作品もある。

「詩の表現形式からいうならば、艾青は自由詩である。勿論詩だから普通の散文にくらべれば音律的な要素を多く具えているが、艾青は詩を成り立たせるものとして、音律的な要素より形象性を遙かに重要と考えている。あるいは、詩的芸術の生命と考えている。

……すこぶる絵画的な音色を出し、艾青を形象の詩人たらしめている。」（3）

と稲田孝は言う。その詩の美は形象力にあるとして、最も典型的に形象されているのが「大堰河」であり、詩の魂は、「魂の歴史とは、最も屈辱的で艱難險阻だった抗日戦の時期を切り抜け、新国家建設の栄光を迎えた中国の人々、そして再び暗黒の渦に巻き込まれ、またそこから立ち上るといふ激しい起伏を経た中国の人々の魂の苦悩と悲哀歎喜の歴史であり、暗黒の谷底から絶えず明るい

太陽を望んで来た希望の歴史である。」⁽⁴⁾と言っているのかどうかはわからないが、いずれにしても「大堰河——我的保姆」という作品にそのすべての源泉がある、という指摘に筆者は突き動かされて、この詩をめぐる、いささかの素朴な疑問に自ら答えるつもりで、幾人かの論を読んでいくことにしたい。

二、大堰河は、何故大叶荷ではなく大堰河なのか。

一九九一年八月に、大堰河の墓前に詩碑が建立された。その詩碑の裏面に次のように書かれてあるという。揮毫した人は、姜東舒という書家らしいが、文案は誰かの記述はない。

大堰河、曹氏（一八七八——一九二四）、金華縣大葉荷村人、自幼到畝田蔣村當童養媳、因艾青的成名作《大堰河——我的保姆》而聞名於世。和千千萬萬世俗的農婦一樣。他不過是一位普通的母性、一位平凡的勞働婦女。而惟普通與平凡、又更顯其偉大與不群。雖一前荒徑、幾尺墳塋、有黃土合抱、綠水回環、終千古垂名、萬世敬歛。籍重整墓地之際、獻茲文以追懷。

公元一九九一年八月⁽⁵⁾

一九九一年になってこの碑文にあるようなことがわかったわけではなく、ずっと以前から解っていたことを整理したにすぎない。ここで明らかにされねばならぬことは、艾青が何故、大葉荷を大堰河と表記したか、ということである。

「大葉荷」（DAYEH）と「大堰河」（DAYANHE）は土地の発音が同じなのだとこのことは、よく言われる。さらに女の子には正式な名前がなかったので、「地名」あるいは「地名」＋「姓別」で呼ばれたという。

前者如本詩的主人公“大堰河”、“她的名字就是生她的村庄的名字”、叫“大叶荷”“大堰河”

是它的諧音。她本姓曹、自幼到詩人故鄉畝田蔣做童養媳。后者如“塘雅園”“金華園”等々……⁽⁶⁾

しかし、これで艾青が「大叶荷」を「大堰河」と表記したことの説明にはならない。唯一伝記の形で読んだ周紅興のこの部分を探すと、いともあつさりと、こう書かれてある。

因為艾青家鄉的土音“大葉荷”与“大堰河”完全一样，所以艾青在詩中就吧“誤写成”“大堰河”了。——。本人のこの部分に言及した文章に「大堰河和艾青筆名」⁽⁷⁾というのがある。

“大堰河”這名字、小时候只是口音的、一九七三年我回家鄉、鄉親們談到這首詩時告訴我“大堰河”其实是“大叶荷”的誤写。我們家鄉的土音“大叶荷”和“大堰河”完全一样。所以、我在詩里写道、“大堰河”是我的保姆。她的名字就是生她村庄的名字、她是童養媳。

この文章で読む限り、大堰河のイメージで艾青はDAYANHEと呼んでいたが、一九七三年に帰郷した折、郷土の人たちに「誤りだ」と指摘されて気がついたら読みとつてもよいようだが、決してそうではあるまい。また「まちがった」と艾青自身が言ったわけではなく、郷土の人たちが「誤写」と言ったのである。この文章に続けて艾青は、次のように書いている。

她卑微到連自己的名字也沒有、从哪里来就叫那里的名、我在“大堰河”家一直住了5年。

この一文によつて、艾青が大叶荷と書くことは十分に承知しながら、あえて幼ない頃からのイメージ通り、大堰河と書いたのだ、と言うことが理解できる。

そこで大堰河という表記に艾青はどんなイメージを抱いたか、あるいは、どんな想いを込めたのか、ということが問題になる。一九五六年に『アイ・チン詩選集』⁽⁸⁾をだしたうさみなおきは、「大堰河を普通名詞として訳せば大きな用水路」と訳注に記している。これも一つの解釈である。楊匡漢は、大堰河は何故河なのか、ということに言及している。

“大堰河”是一个美麗而神秘的名字。半个多世紀前、当艾青成名作《大堰河——我的保姆》蜚声全

国、曾經有位善意的批評家天真地索隱、
“美国有密西西比河、德國有萊茵河、蘇聯有靜靜的頓河、
中国有大堰河……”⁽⁹⁾

艾青は、大堰河を中国に流れる一つの河に喩え、大叶荷ではなく大堰河としたのだ、という言い方は、人々を納得させるものがある。

しかし実際に何故大堰河なのかということは少しも解決もしていないし得心もいかないのだが。

艾青は、文字に書くこともなく、DAY AN HEと呼びならわしていた。詩を書き出すまで大堰河に違いないと信じていたとしよう。

しかし、ひとたび文字にして見て、大叶荷であることは容易に気がついたはずである。

それでもあえて大堰河と書いたのには、艾青の心情的なものが働いていたことを感じさせる。またこういう文章もある。

“大堰河”是艾青的根。艾青確認自己是一个卑微到連名字都没有的貧苦勞働婦女的真實的兒子……⁽¹⁰⁾

艾青は自分の名前には、自己の卑少さを表わすものはないけれども、という言い廻しの中に、大叶荷を避け大堰河と表記した真実が秘められているように思われるのである。

三、「大堰河」の実像と虚像について

雪の朝、突然乳母を思い出し、なつかしさのあまり「大堰河、私の乳母よ」と歌い出したのだ、と単純に考える研究者はさすがにもういない。

しかし王克儉⁽¹¹⁾はこう書いている。

“大叶荷” 這個“初始意象” 既然在詩人的心理生活中如此經常誦動不安、那么特別是在他的監獄生活的環境中、更加懷念他是十分自然的。尤其那時天正下着雪。(12)

王克儉は、監獄生活や雪が創作のモチーフ（動機）にかかわると言う。ここで提示された「初始意象」は、先にも引用した艾青自筆の「大堰河和艾青笔名」という文章の中にある、次のような箇所⁽¹³⁾に依拠して考察されたものと思われる。

在“大堰河”家里5年、使我感染了農民的种憂鬱和傷感、使我對農民有了一種朦朧的初步印象。

詩人は確かに他の農民に感じたと同様の印象を大堰河にも抱いていたに違いないと、王克儉は言うのである。

可見詩人對她的乳媽的“初始意象”並不是一種“母恋情結”、而是融合着“中國農民”的“朦朧初步印象”。(13)

しかし、艾青には、ユング⁽¹⁴⁾の言う「集体無意識」心理があつた。これは原始意識的遺伝というもので、言い換えると種属の發展歴史の中でゆつくりと形成された深層心理のことだそうである。

是一種代代相伝的無数同類經驗在某一种族全体人員心理即“集体無意識”心理上的積淀物。他指出偉大的作家正是接受了這種“集体無意識”的影響、才創作了能够觸及他的民族之魂的偉大詩篇。

さらに艾青には、革命理論と文學理論があつた。

并且在接觸革命的理論与社会實踐中有了先進階級的思想武裝。同時這一切又在詩人的心理世界不斷地相互交融与冶鑄。于是一个以“大叶荷”的“初始意象”為胚胎的新的大堰河的詩歌形象終於孕育成熟。“一口气写下了”《大堰河——我的保姆》也就成為詩人潛存于心灵深处的創造力爆發的必然。(15)

王克儉の結論は実に明解で、筆者が今まで考えてきたことに一つの結論を与えてくれるものである。

った。

众所周知、詩人の保姆の名字就是他出生的村庄的名字。但那村庄本叫“大叶荷”。詩人自己說是只因他家鄉土音“大叶荷”与“大堰河”完全一样、便誤写成“大堰河”。詩人自然没有想到就這一無意的誤写、却曾造成了一些有趣的誤会、有的人便以為“大堰河”是一条河流、于是就比興道、德國有萊茵河、法國有塞納河、俄國有靜靜的頓河、中國有一條大堰河……這真是一處十分巧妙而又有意義的誤写。說它有意義、是因為詩人的這種看似隨手拈來的無意識的誤写、却把原本是指代詩人個體的“保姆”的“初始意象”“大叶荷”、變成了指代大我的藝術形象“大堰河”。于是“大堰河”也即成了千千萬萬中華勞動婦女的“集体”的化身、成了孕育萬物的中華大地、成了以自己辛勤勞作供養人類生存、以自己乳液哺育着和以自己光熱溫暖着她的孩子們的母親的象徵、成了整個中華民族“集体無意識”的一種昇華。

この所論は全く解り易い。換言すれば、大叶荷は実像であり、大堰河は虚像であるということになる。大叶荷は艾青が第一印象で得たイメージどおりの、どこか輪郭の明確でない、一人の農婦であつた。そしてその労働も容易なものではなにかかわらず、大堰河は見事にこなしていくのである。艾青にとって、そういう生活が当然の姿であり、特別珍しいものでもなかった。五歳になつて生家に連れもどされた艾青は、生家の生活があまりにかけ離れていることに大きな衝撃を受けずにはいられたかつた。この衝撃の大きさが大堰河を生んだとも言えた。

詩作品の中で描かれる大堰河は、まさに大堰河であつて決して大叶荷ではないのだが、描かれる仕事の種類、しぐさの数々は実在した大叶荷のそれと変わるところはないものと思われる。「大堰河——我的保姆」の中の民族風習の面から作品分析を試みている黄子奇⁽¹⁾の文章を読んで見ることにしよう。

在你塔好了灶火之后

(燒飯習俗)

(あなたはおかまどの火を炊きつけたあとで) (一)
燒き飯と読むと誤りを犯す。燒飯は飯を炊くである。金華市は日本とほとんど変わらない方法での炊飯である。

在你拍去了圍裙上的炭灰之后

(服飾習俗)

エプロンを風呂敷がわりにして物を包んだり、灰やゴミを入れて運ぶという風習は日本とそれほど異なったものではないと思われる。

在你賞到飯已煮熟了之后

(飲食習俗)

これはイメージが湧かない。現在では勿論ご飯の炊け具合を見るために途中で試食してみるということはあり得ない。この詩句の場合、釜なのか甕(窯)なのか鍋なのかわからない。いずれにしても炊飯の途中ないしは終わり近くに、飯の炊け具合を試食したという習俗があったであろう。

在你把烏黑的醬碗放到烏黑的桌子上之后

(飲食家具)

味噌瓶が真っ黒で、食卓も真っ黒だということであろうか。(一)食卓は日本ですぐ連想する袱台ではあるまい、と思うのだが。

在你補好了兒子們的為山腰的荊棘扯破的衣服之后

(家務習俗、也包含服飾習俗及生產勞動砍

柴習俗)

子どもの衣服の繕いもの、であろう。大堰河には里子の艾青の他に男の子が五人もいた。

繕い物は大堰河の重大な任務であつたに違いない。

在你把夫兒們的襯衣上的虱子一顆一顆的掐死之后

(衛生習俗、土医土薬)

むかしの日本の農村でもよく見かけた風景で虱をどう処理したかを知りたい。筆者の記憶にある日本の処理方法は、両手の親指の爪の間にはさんで、ぴちゅとつぶす方法が一般的であつた。あるいは、口へ放り入れて前歯でぴちゅとかむ、という方法も何度か目撃している。艾青のこの詩句には何も具体的な描写はないし、黄子奇の文章にも解説はない。

在你拿起了今天的第一顆雞蛋之后 (飼養習俗、養鷄)

鷄は放し飼いで卵は地面に生みつばなし、たぶん集めて歩くのであろう。

以上の用事を済ませたあと、大堰河は艾青を抱きしめ、背中をさすってくれたのだつた。

もう一カ所、大堰河が労働をする場面が詩の中に描かれている。艾青が「芸術形象によつて大堰河に変化させた」ので、我々の受けるイメージは、すべからく大堰河なのである。

さらに乳母の労働^①の描写がある。我々は この描写の中に大堰河と同時に大叶荷をも読みとつていく必要がある。それは艾青によつて大叶荷が大堰河に変換させられているからである。

她含着笑、洗着我們的衣服 (洗濯)

(彼女は笑みを湛えて、わたしたちの着物を洗い)

她含着笑、提着菜籃到村邊的結冰的池塘去 (洗菜)

(彼女は笑みを湛えて、野菜籃を下げて村外れの氷の張った池へゆき)

她含着笑、切着冰屑悉索的蘿卜 (養猪)

(彼女は笑みを湛えて、カサカサに凍った大根を刻み)

她含着笑、用手掬着猪吃的麦糟 (養猪)

(彼女は笑みを湛えて、素手で豚に食わせるかいば槽の麦を掻き回し)

她含着笑、扇着炖肉的炉子的火 (飲食)

(彼女は笑みを湛えて、豚肉を煮込む炉の火を扇ぎ)

她含着笑、背了團箕到広場上去晒好那些大豆小麦 (晒物)

(彼女は笑みを湛えて、円い箕を背負って広場へ行き、あれらの大豆や小麦を陽にさらす)
これらの描写は、乳母の労働の様子である。

最初の(她含着笑)のリフレインを外しても、大堰河は美しい農婦であり、知性美にあふれている。

我的保姆你們可能認為很美、其實她長得不好看、詩里没有写她的相貌。(?)

と艾青自らもこう言っているし、この部分から敷衍して蔣風(?)は次のように書いている。

艾青は位視覚非常敏銳的詩人、在生活中、他不僅能看到別人能見到的東西、而且還能看見別人看不見的東西。也許与他早年学画有関有的情節通過蒙太奇手法予以剪接和組合、結構成一組感人的鏡頭。

艾青の巧みな芸術的形象力を讀んでいる文章だと考えてよいであろう。だがしかし、続いて蔣風は次のように結論づけるのである。

他就這樣用自己手中的生花妙筆、塑造了一位勤勞、朴实、善良的労働婦女的形象、抒發了对這位貧苦的大堰河的懷念之情、感激之情和贊美之情、表達了对“這不公平的世界”的詛呪和憤懣。但由于大堰河的遭際正如千千万万旧中国貧苦農女的命運写照。大堰河的悲慘經歷、就不是她一个人的悲劇、也是时代的和社会的悲劇。(23)

以上のように結論づけられると、いやわかっていきます、と言いたくなる。我々はここまで艾青が何故、大叶荷としないで大堰河としたのか、大叶荷と大堰河は別人であり、大堰河は艾青が芸術的形象を施して作られた虚構の人物であるというところまでたどりついたところである。

「大堰河——我的保姆」の中には、美しくて、貧苦に耐え、よく働く気丈な農婦がいる。しかし実在したモデルの大叶荷は、「長得不好看」であつた。本詩の中で、少しでも大叶荷に近いイメージを追つても、そこには大堰河がいるだけだ、ということとは前にも述べた。

大堰河の行動や様子は伝聞なので、誰かの筆によつて残されたものに過ぎない。

それでも大叶荷の面影を伝える実像に近いものを感じさせる部分はある。例えば本詩の中にある、

啊、大堰河，你为什么哭？

とか、

『艾青伝』の中にある、次のような描写である。

艾青五歳の時候、他的父母把他从大堰河家领走、大堰河舍不得自己的乳儿、她望着他离去的小小的身影、泪流不止。

楊匡漢の文章⁽³⁾にも次のような個所がある。

小艾青被別的孩子欺侮得哭了、她也偷偷啜泣。

本詩の詩句以外は、艾青の書いたものか、艾青に取材して仕入れたものを、それぞれの著者が表現したもの過ぎないのだが、筆者には大堰河ではなく、大叶荷の面影を彷彿とさせる文章に感じられたので引用して見た。

王克儉にこういう文章もある。

作為“初始意象”的大叶荷“要作為行動回到生活中来”也就可以理解。

一九九一年に金華市で艾青研究会があり、その折大堰河の墓地を修繕して墓碑題字を艾青に揮毫してもらつた。その折艾青が王克儉に話したことばのようだ。大叶荷が艾青の行動を常に生活の場

に引きもどす役割を果してくれたのだ、と艾青が語ったというのである。

艾青の中でずっと住み続けていたのは、実は大堰河ではなく、大叶荷その人だったのだ、ということも言えるわけである。本詩の蔭にいろ大叶荷は、艾青に何を与えたのかを我々はもう少し知りたいと思う。

四、大叶荷の与えたもの

艾青は淡々と、こう語っている。これこそが大叶荷が艾青に与えたものだと考えてよいであろう。

我覺得只有在“大堰河”家里、我才感到温暖、得到寵愛。“大堰河”很愛我、我也愛她。

次の証言は艾青と大叶荷の間の愛情について考えさせられるものがある。

艾青曾跟我專門談到這首詩的創作。《大堰河——我的保姆》是出于一种感激的心情写的。

我的保姆長得不好看。她生了好多孩子、喂養我時已是第五个子、奶也已不多、不可能哺育得很好、所以我缺鈣。

不過我幼小的心灵中總是愛她。真到成年、也還是常常的愛她。(55)

筆者が注目したのは、この文章に続く次の様な部分である。

我清楚記得、当艾青進到這里時、他也抬起寬寬的前額、双眼射出情痴光芒。我感受到他胸間翻起眷戀逝者的波瀾、那首詩又在他肺腑中漫漫涌出、大堰河／我是吃了你的奶而長大了的／你的兒子／我敬你／愛你！

大叶荷が艾青に与えたもの、それは無償の愛であり、無智で無学ゆえにより本能的な形で与えられた愛の大きさではなかったか、と考える。ところが、そうには違いないのだが、大叶荷から大堰

河に形象化されていく過程で艾青の中の意識に「大堰河」を普遍性をもった農婦の典型にしようにとする意識の表出を読みとるといふ観点から論を展開している人がある。汪亜明^(註)である。彼はこう言うのである。

母親深愛她的儿子、儿子又以同样的愛回報給他的母親、這对于具有血緣關係的母与子來說似乎是天經地義的、但我們的詩人与大堰河之間並沒有這種血緣親情的聯系、而只是哺育与被哺育、雇佣与被雇佣之間的聯系。如果以階級斗争的眼光来看、她們分属两个不同的相互对立階級、正像詩人說。

我是地主的兒子

也是吃了大堰河的奶而長大了的

大堰河的兒子

大堰河以養育我而養育她的家。

而我、是吃了你的奶而被養育了的

大堰河啊、我的保姆。

沒有了血緣的親情、那么乳兒对乳母的愛似乎只是对養育之恩的回報事实上、詩人也正是這樣做的、他在詩中反復渲染這種養育之恩、次に引用する部分が、「反復して大げさに養育の恩を書いている」と汪亜明は言うのだが果たしてそうであろうか。

大堰河、今天、你的乳兒是在監獄里

(大堰河、きょう、あなたの里子は獄にいて)

写着一首呈給你的贊美詩

(あなたへ捧げる贊美の歌を書き)

呈給你黃土下紫色的靈魂

(黃色い土の下の紫色のあなたの靈魂へ捧げ)

呈給你拥抱過我的直伸着手

(わたしを抱こうと差し延べたあなたの手へ捧げ)

呈給你吻過我的唇、

(わたしにくちづけしたあなたの唇に捧げ)

呈給你泥黒的溫柔的臉顏

(泥んこ色の柔しいあなたの顔に捧げ)

呈給你養育了我的乳房

(わたしを育ててくれたあなたの乳房へ捧げ)

呈給你的兒子們、我的兄弟們

(あなたのこどもたち、わたしの兄弟たちへ捧げ)

呈給大地一切的

(大地のありとある)

我的大堰河般的保姆和他們的兒子

(わたしの大堰河のような乳母と彼女たちのこどもへ捧げ)

呈給愛我如愛她自己的兒子般的大堰河。

(わたしを自分のこどものように可愛がった大堰河に捧げる。)

筆者には、養育の恩を書いているというより、この部分こそ正に大叶荷から中国全土に広がる普遍性を持った大堰河に変身する場面だと読んだ。そして顕著にその変化を感じさせる節がもう一カ

所ある。

大堰河、含泪的去！

（大堰河は、涙を湛えて去っていった！）

同着四十幾年的人世生活的凌侮

（四十幾年間のこの世の辛さとともに）

同着数不尽的奴隸的凄苦

（数えきれない奴隸の惨めさとともに）

同着四块錢的棺材和幾束稻草

（たった四元の棺桶と幾束かの藁とともに）

同着幾尺長方的埋棺材的土地

（三、四尺四方の棺桶を埋める土地とともに）

同着一手把的紙錢的灰

（ひと掴みの紙錢とともに）

大堰河、他含泪的去了。

（大堰河、彼女は涙を湛えて去っていった。）

筆者には、ことさらにこういう主張を声高に言うことによつて大叶荷の実像は遠のいていくように思われてならないが、艾青の文学形象化にとつて、必要な作業であつたのだ。

汪亜明もまた結論の部分で次のように言っている。

應該說、詩人対人対大堰河的愛是深厚而博大的、其中有養育之恩、有対乳母不幸命運的同情、更有対所有像乳母一样不幸的母親們的深深的同情、在這種同情里既有階級的意識。也有人道主義的博

愛精神、正是這諸种情感的交織形式了巨大的情感張力、撞擊着我們的心灵。(2)

「大叶荷」と「大堰河」あるいは、艾青の形象化による変化とか差異を考えたかったのだが、一気に括られて、いささか肩すかしの感がないこともない。

艾青の弟の蔣海濤⁽³⁾が「關於艾青研究的幾個問題」という文章を書いている。

「大堰河はいつも微笑んでいるように書かれているが本当か？」という質問を受けたそうだが、蔣海濤の母親は「大堰河很和氣、總是笑嘻嘻的」と言っていたという。蔣海濤はこの「含着笑」は、旧社会の雇われ女に共通したもので、「祝福」⁽⁴⁾に出てくる祥林嫂と同じなのだ、というのである。確かに祥林嫂もはじめて魯四旦那の家へ来たところは口もとに笑いを浮かべていた。祥林嫂と大堰河に共通するのは、童養媳であること、「含着笑」の状態が一部の時期二人ともあったこと、共に男運がわるく、二人の夫にまみえ、最後は不幸な生涯に終わったこと。しかし祥林嫂は最後に「人間の魂は存在するのか」「地獄はあるのか」という命題を抱えて行き倒れて死ぬ。

大堰河は酒癖の悪い二度目の夫に殴られたりしながら死んでいくが、精神的にはずっと楽に生きた。艾青もまた大堰河にそういう精神的負担をかけさせられなかった。

蔣海濤はこう言うのである。

她那善良而又微薄的人生愿望、又使她对自己目前能勉強過下去的生活感到微弱的安慰。

蔣海濤はさらに「一个黑人姑娘在歌唱」⁽⁵⁾（ひとりの黒人の少女が歌をうたっている）の白人の小さな主人と黒人の少女の關係は、艾青と大堰河と同じだ、と言っている。黒人の少女は子守であり、子守をされている赤ん坊は白人である。この二人の關係が、艾青と大堰河の關係にそのまま移して考えられるということはない。蔣海濤は特に最後の二節を引用して「大堰河の微笑」と黒人娘の「楽しい歌」は同質だと言っている。筆者にはそうとは思えない。

一个是那样黑、
黑得像紫檀木

一个是这样白

白得像棉絮。

一个多么舒服

却在不断地哭

一个多么可怜

却要唱欢乐的歌。

（ひとりには紫檀の樹みたい／あんなにも黒々として／ひとりにはまるで棉花みたいに／あんなにも白い。／ひとりにはなんとこちよいのに／いつまでも泣いて／ひとりはなんと哀れなのに／楽しい歌をうたいつづけている。）

この詩の「黒」が「大堰河」で、「白」が「艾青」だという解釈は無理であろう。「黒」が楽しげに歌えば、「白」は聞き耳をたてる。「白」が哭けば、それを無視して「黒」が歌い続けるということはあり得ない。大堰河と艾青の間に、それだけの人間の素朴な心の通じ合いがあったと見なければ「大堰河——我的保姆」という詩は成立しない。黒人娘と大堰河が社会の最下層にいて、不合理と不公平な処遇を受けているという点で共通するということを蔣海濤は言いたかったのである。うし、祥林嫂と大堰河が“含着笑”ということと共通すると言いたかったのも知れない。しかしそういう引例は誤解を招く恐れがあるので筆者などは賛成できない。大堰河が艾青に与えたものは、やはり素朴な「愛」という他はない。

五、「大堰河」を中華民族の二大潮流の一つにしてよいのか。

筆者はここまで来て、にわかに王克儉の論文⁽³⁾を思い出していた。

集体深層心理というものが、どの民族にも存在するのだ、ということが、「心理学」上で認知されていることなのかどうか、筆者には不明だが、王克儉によると、民族が代々伝えてきた無数の同類経験の集積が、「集体無意識」というものを形成する。その「集体無意識」の心理的堆積物が民族の深層に集積するのだという。それを王克儉は、「集体」深層心理と呼んでいる。

魯迅的《阿Q正伝》、也正是由于空前地触及到了一种“集体”深層心理、使許多中国人本能地感受到自身心灵深处的某些影子。也正由于此、使世界了解了世界、了解了中国人的某种深層心理。⁽³⁾確かに「阿Q」的集体心理が中国人にあることは認めよう。しかしそれだけで中華民族が發展して来たわけではない。そこで王克儉は、こうつけ加えるのである。

因為在中華民族的“集体”深層心理中不僅有阿Q、還有大堰河！

大堰河が阿Qと同様、中華民族の集体深層に伝承してきたものは何か。

大堰河——潜在于中華民族“集体無意識”心理深处的勤勞、仁慈、寬厚、堅韌的美好品質的芸術昇華、在革命戰爭年代曾經鼓舞多少中華儿女投身于革命、為祖國的自由和解放而獻身。

具体的に大堰河の示した中華民族の集体深層心理とは、黙々と働くこと。重労働のあと、自分の母乳を我が子に飲ませ、さらに里子に飲ませ、また重労働にもどっていく。これが中華民族の源流の一つだ、というわけだ。

她的愛是多麼真摯、她的胸襟是多麼寬廣、她的心灵是多麼美好、她的雙手是多麼有力、她的意志

是多么堅韌！

包括詩人自己在內的一切優秀的中華民族的兒女們，正是由于在自己的心靈深處接受了這一美好的“集体”心理図譜，才經受住了如此深重的外患与内乱，又能以如此堅定的步伐向着自己的目標邁進。

「阿Q」が唯一、中華民族の集体深層心理だと規定されてはたまらない。「馬々虎々」な人間が、典型的な中国人だと世界中に固定的に考えられては、『中国に救いはない』。

阿Qの集体深層心理が中華民族にあることは認めよう。孔子の指摘する「小人」も、まさに「古代の阿Q」であろう。しかし阿Q的集体深層心理だけで中華民族の歴史や文化が動いてきたわけではない、という想いが、王克儉をはじめ中国知識人の中にあることは、まちがいないまい。

そこで「阿Q」もいるが、「大堰河」もいる、ということになる。また大堰河が、ミシシッピ、ライン、ドンなどと並ぶ河でなければならぬ意味が、ここへ来て明らかになった。

詩人正是発掘了這個与魯迅的阿Q互為反襯的中國民族的“集体”心理図譜、并在這個美好的“集体”心理図譜激勵下把自己也投身于人類美好事業、才使自己不但属于中国、而且還属于世界。（中略）

阿Q互為反襯的中華民族美好的“集体”心理図譜——大堰河捧向全人類。（33）

というのが、王克儉の結論である。確かに新しい視点だと感心したのだが、次第に違うのじゃないか、牽強付会だ、我田引水、などということばが筆者の脳裏に飛び交い始めた。

多くの研究者や評論家は先に引用した蔣風の結論に近い。しかし王克儉の所論は今までにない新しい視点を持っている。論文のタイトルは「大堰河が艾青を創った」⁽³⁴⁾であったり、サブタイトルに「ゲーテが『ファウスト』を創ったのではなく『ファウスト』がゲーテを創った」⁽³⁵⁾というユニ

グの言葉を掲げている。

それはそれでいいのだが、天国で大堰河は目を白黒させていはしないか。艾青にしても、「大堰河をそんなところへ押し上げないでくれ。阿Qと並ぶ潮流だ、なんて」と言うかどうかはわからぬが、「言わせてくれ。大堰河、也早已不是您的私産」⁽³⁾という研究者や評論家がふえてくることは、まちがいないところだと思われる。

《注》

- (1) 『艾青伝』 作家出版社 P 17
- (2) 楊匡漢によると、艾青には長詩が二〇 短詩一〇〇〇 文章三〇があると書いている。『艾青紀念文集』 P 180
- (3) 『艾青訳詩集―芦の笛』 稲田孝訳著 頸草出版サービスセンター刊
- (4) 同前の稲田孝の文章
- (5) 『艾青懷鄉詩選析』 (北京大学出版社) 扉のグラビア写真。
- (6) 『故郷的艾青』 P 287 黄子奇の『『大堰河―我的保姆』中的民俗描写及其教学』前出の『故郷的艾青』 P 31
- (7)
- (8) 現代中国新書、小野十三郎との共著法律文化社刊
- (9) 『艾青記念文集』作家出版社刊一九九九年 P 180
- (10) 前出書 P 182
- (11) 浙江師範大学創作研究室 『艾青懷鄉詩選析』 編著者
- (12) 前出書 P 14

- (13) 前出書 P 15
- (14) スイスの心理学者。王克儉はしきりに心理学を応用してこの論文を書いている。
- (15) 前書同 P 14
- (16) 『故郷的艾青』の中の「《大堰河——我的保姆》中的民俗描写及其教学」この本のP 53に艾青といつしよの写真があり黄子奇は《金華県教育志》主筆とある。
- (17) 訳詩はすべて秋吉久紀夫氏のを借用する。
- (18) 蒋海濤は同じ本の中の「关于艾青研究几个问题」の中でこの部分について、「這一碗醬反復蒸了多次、所以 變得烏黑。」と書いている。
- (19) この労働は「女佣」つまり地主の家での家事労働である。蒋海濤によると大堰河は艾青の生家の「女佣」でもあったようである。
- (20) 蒋海濤の文章にこうある。 在我們家鄉常常用燒熟的大麦、紅蘿卜、自蘿卜等和在一起喂猪、有时也混進一些酒糠。
- (21) 「与青年詩人談詩」艾青全集三卷 P 458
- (22) 浙江省金華市在住の児童文学研究者。元浙江師範大学長。艾青に関する論文も数多くある。
- (23) 蒋風「灼灼燃燒的生命」『故郷的艾青』 P 251
- (24) 「从大堰河到虎斑貝」『艾青紀念文集』 P 182
- (25) 楊匡漢「从大堰河到虎斑貝」 P 181
- (26) 『故郷的艾青』の中の「人情重懷土・飛鳥思故郷」
- (27) 前出書 P 300
- (28) 金華市にある浙江師範大学の副教授で退職し現在も大学の住宅街に住んでいる。
- (29) 魯迅の小説
- (30) 一九五四年南米リオデジャネイロでの取材作。

- (31) 『艾青懷鄉詩選析』の中の「大堰河創造了艾青」
- (32) 前出書 P 24
- (33) 前出書 P 24、25
- (34) 大堰河創造了艾青
- (35) 不是歌德創造了《浮士德》而是浮士德創造了歌德——榮格
- (36) 楊匡漢のことば P 181 『艾青紀念文集』

参考文献

- 『艾青懷鄉詩選析』 北京大学出版社 一九九四年 王克儉編析
- 『故鄉的艾青』 政協金華市委員會文史委 艾青紀念館編 二〇〇一年
- 『艾青紀念文集』 作家出版社 一九九九年
- 『艾青全集』 第一卷・第三卷 花山文芸出版社
- 『艾青伝』 作家出版社、周紅興 一九九三年
- 『艾青詩集』 秋吉久紀夫 訳編 土曜美術社出版販売 一九九五年
- 『艾青訳詩集』 稲田孝 訳編 頸草出版サーピスセンター 一九八七年
- 『艾青詩選集』 小野十三郎・うさみなおき編 法律文化社 一九五六年
- 『現代中国学』 加地伸行 中公新書 一九九七年